

はじめに

山本博之

この教材は、「ジャウィ文献と社会」研究会が毎年実施しているジャウィ文献講読講習会のために作成しているテキストの 2012 年度版です。

ジャウィ (Jawi) とは、島嶼部東南アジア (イスラム教圏東南アジア) における共通語であるマレー・インドネシア語の表記方法の 1 つで、アラビア文字をマレー・インドネシア語にあわせて一部改変したものです。

ジャウィは、20 世紀初頭頃まで島嶼部東南アジアの地元住民 (特にイスラム教徒) にとって主要な文字であり続けました。しかし、20 世紀半ばまでにローマ字 (ラテン文字) が広く使われるようになると、ジャウィが使われる機会は減ってきました。そのためもあり、島嶼部東南アジアの社会を研究する上で、特に 20 世紀以降を対象にする場合、ジャウィ文献を積極的に使った研究はそれほど多くありません。

しかし、20 世紀以降の東南アジア社会を理解する上でも、ジャウィ文献は依然として有効性を失っていないと私たちは考えます。

その理由は、第一に、これまで主にローマ字文献に基づいて行われてきた島嶼部東南アジアの研究を別の角度から見直す契機とすることができるためです。このテキストで主に扱っている月刊誌の『カラム』(1950 年～1969 年) は、その目的のための貴重な資料の 1 つです。

第二に、島嶼部東南アジアの人々による国境を越えたつながりに積極的に目を向けた社会像を考える契機とするためです。20 世紀半ば以降、マレーシアやインドネシアが国民国家として建国を進める過程で、それまで存在していた国境を越えた行き来や関係にほとんど目が向けられなくなりました。これに対し、ジャウィ文献には国境を越えた行き来や関係を積極的に記したものが多数あります。

ジャウィ文献を積極的に活用して東南アジア社会の歴史の再構成を試みることは、これまで語られてきた国別のナショナリスト的な東南アジアの近現代史を別の角度から見直すことの試みでもあります。ローマ字が主流となった現在では珍しくなった「ジャウィ」という文字や文献それ自体に関心を向けて資料収集するだけでなく、実際にジャウィ文献を読むことにより、ジャウィが使われていた時代や地域の社会の様子を明らかにすることを目的としています。

*

ジャウィはアラビア語とともに東南アジアにもたらされました。島嶼部東南アジアのイスラム教徒にとって、アラビア語は聖なる言葉であり、宗教に関する概念の多くはアラビア語のままマレー・インドネシア語に取り入れられました。

ただし、アラビア語とマレー・インドネシア語は互いにまるで異なる言葉なので、アラビア文字をそのまま使ってもマレー・インドネシア語をうまく表記できるわけではありません。アラビア語にはマレー・インドネシア語にない音がいくつかあるため、マレー・インドネシア語ではいくつか独自の文字を作る必要がありました。

また、アラビア語の母音表記法を取り入れなかったため、ジャウイは子音だけを並べる表記方法にならざるを得ず、ジャウイを読む際にはどのように母音を補うか（書く際にはどのように母音を省略するか）というルールを確立する必要が生じました。時代や地域によってジャウイの正書法は異なりますが、時代を追って正書法の移り変わりを見ていくと、なるべく母音を表記して、ジャウイによる表記とローマ字による表記を一対一で対応させるように正書法が変わってきていることがわかります。

ただし、宗教に密接に関する語彙については、一般の語彙と同様に母音を補ってローマ字と同じような形で表記すべきとの意見が出る一方で、ジャウイで書いたときにもとのアラビア語の表記と異なってしまうのは適切でないとの意見も強く、母音を補ったりせずにジャウイでもアラビア語の表記と同じ形で表記するという考え方が優勢のようです。

このように、ジャウイの表記法は、宗教に関する語彙とそれ以外の語彙で異なる方向で発展してきました。（どれが宗教に関する語彙でどれがそれ以外の語彙かという区別も、時代によって変わってきています。）

ジャウイの表記法は、時代や地域によって異なり、また、同じ時代や地域でも個人による表記の揺れも見られます。この研究会では、ジャウイ表記がただ1つに定まっていなことは、多様な文化的背景を持つ人々の共通語であるマレー・インドネシア語の表記法にふさわしいと考え、特定の表記方法のみを取り上げて「正しいジャウイ表記である」と主張することはしません。ただし、初学者向けには「いろいろある」では練習になりませんので、ジャウイ文献講読講習会では、20世紀前半にジャウイ表記の正書法を体系化しようとしたザアバ（Za'ba）による「ザアバ綴り」を中心に上げ、そのうえでそれ以外の表記法を扱うことにしています。

*

「正しいジャウイ表記がある」と主張するわけではないのに、どうして特定の時代の特定の表記法を学ぶ必要があるのでしょうか。実は、「ザアバ綴り」の法則がわからなくても、アラビア語の素養があり、そしてマレー・インドネシア語のある程度の語彙があれば、ジャウイを見てそのローマ字表記を当てることはそれほど難しいことではありません。でも、それではジャウイ文献を読んだことにはならないと私たちは考えます。

漢字の発祥地である中国の人が日本に来たら、町の看板を一目見ただけでだいたいの意味を掴むことができるはずです。しかし、日本語と中国語では字が同じでも意味が異なる

ものが少なくなく、日本語がわからなくても中国語がわかれば日本語の文を読んで意味が理解できるということにはなりません。漢字はもともと中国から日本に来たのだと言ったところで、日本で独自に発展した漢字文化を否定できるわけではないはずです。

アラビア語とジャウイの関係もこれと同じです。ジャウイにはアラビア語からの借用語も多く、アラビア語がわかればマレー・インドネシア語がわからなくてもジャウイで書かれた文のおおよその意味は掴めるでしょうが、ジャウイで書かれた文書の内容をきちんと理解するにはマレー・インドネシア語の知識が不可欠です。アラビア文字がもともとアラビア語の文字であっても、そして東南アジアで多くの人々に信仰されているイスラム教が中東から東南アジアに伝えられたものであっても、アラビア語に通じた人がマレー・インドネシア語を知らなくてもジャウイが読めるということにはならないはずです。

アラビア語の知識からの類推ではなく、ジャウイをジャウイとして読むために、私たちの研究会が主催するジャウイ文献講読講習会では、まずジャウイの母音を省略したり補ったりする法則を学ぶことにしています。

ところで、ジャウイ文献を読解する上での最大の難関は、実は母音を省略したり補ったりする法則を理解することではなく、1つ1つの文字を判読することです。手書きの文献は判読が難しいということは想像がつくと思いますが、20世紀に入って新聞や雑誌のような手書きでない文献を扱えば判読の難易度が下がるというわけでもありません。私たちが利用できるマイクロフィルムやコピーの資料には印刷の掠れや汚れがあり、それが文字の一部なのか汚れなのか、点がついているのかついていないのかが判断できないことも少なくありません。ときには「心の目」で読まざるを得ない場合もありますが、そうであっても、ただの当てずっぽうではなく、その文献の中で使われている法則を理解していれば、その法則に従って適切に可能性を狭めていくことができます。つまり、法則は、「心の目」を鍛えるための手段なのです。「心の目」を養うのは慣れによるところが大きいのですが、その基礎を作るために最も適しているのは20世紀前半にマレーシア地域で広く使われていた「ザアバ綴り」です。

このテキストは、初級編と中級編に分かれています。

初級編では、まず20世紀前半のマレーシア地域で広く使われていたジャウイ綴りの法則を学び、そのうえで、20世紀半ばにシンガポール（後にマレーシア）で刊行されていた月刊誌『カラム』の実際の誌面を読みます。中級編では、『カラム』を中心に実際のジャウイ文献を教材にしています。教材によっては文字が掠れていたり印刷が汚れていたりして文字が判別しにくいものもありますが、それがジャウイ文献講読の現実だと思って、苦労しながら判読していただければと思います。

初級編と中級編のテキストに続いて、このテキストの後半では、時代や地域が異なるさまざまなジャウイ文献を紹介しています。主に20世紀以降の定期刊行物で、時代や地域ご

との綴り方の変遷がわかる資料になっています。特に『マスティカ』と『ディアン』の2つの記事は、『マスティカ』はジャウィ版からローマ字版に切り替える最終号の記事を、『ディアン』はジャウィの新しい綴り方である「ディアン綴り」を提唱した記事を紹介しており、どちらもマレーシア・シンガポールのマレー語雑誌がジャウィ表記をどう捉えるかに関する貴重な資料です。また、1990年代のマレーシアや2000年代のインドネシアで刊行されていたジャウィ雑誌も紹介しています。講習会では1つ1つの文献の内容まで扱う時間の余裕がないと思いますが、参加者のみなさんは関心に合わせて読んでみてください。

続く資料編では、東南アジアの歴史において重要なジャウィ文献をいくつか紹介しています。また、巻末には、「ジャウィ文献と社会」研究会が他の研究プロジェクトなどと合同で進めているジャウィ雑誌記事データベース・プロジェクト（『カラム』の時代）プロジェクト）を紹介しています。

このほか、ページの余白の囲み記事では、東南アジア各地の看板などに見られるジャウィを紹介しています。

このテキストに掲載されたさまざまなジャウィ文献が、アラビア文字で書かれた文献をローマ字に置き換える技術を身につけるだけでなく、その文献の奥に広がっている世界への想像力を高める助けになれば幸いです。

*

「ジャウィ文献と社会」研究会は、旧ジャウィ文書研究会（2001年～2009年）の活動の蓄積を活用・発展させるため、旧ジャウィ文書研究会の活動の一部を受け継いで組織された研究会です。ジャウィ文書研究会が活動していた2001年からの数年間は、日本国内で「ジャウィ研究」がかなりの盛り上がりを見せていた時期でした。ただし、今から振り返ると、この盛り上がりは、中東・イスラム研究者による東南アジアへの関心と東南アジア研究者によるイスラム教への関心が重なったところに、東南アジアの地方語による文献資料に対する関心の高まりが加わって、東南アジアでアラビア文字で表記された言葉やその文献に関心が向けられ、それらがやや安易に「ジャウィ」と総称されていた側面があったように思います。そのため、「アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法」という本来の意味を離れ、東南アジアで用いられている言語でアラビア文字で書かれていればどれもジャウィと呼ぶという態度も見られました。

文献の内容ではなく文字に関心が向けられた結果として、マレー・インドネシア語の運用能力を問わずに東南アジアのイスラム教やムスリムに関心がある研究者が広く集まることができたという側面がありますが、他方で、このような「ジャウィ研究」においては、文献の内容ではなく、その文書がアラビア文字で書かれていること自体に関心が向かうこととなります。そこでは、「ジャウィ」とは「アラビア文字」とほぼ同義になり、また、それゆえに「ジャウィ」は「アラブ」や「イスラム教」との結び付きが強

調されることとなります。

これに対し、ジャウィ文献の内容をもとに当時の東南アジア社会の様子を理解したいと思う人々が集まり、「ジャウィ文献と社会」研究会を立ち上げました。この研究会では、これまで研究にあまり活用されてこなかったマレー・インドネシア語のジャウィ文献を積極的に利用することで、ジャウィ文献が書かれ、読まれていた社会の様子を明らかにすることを目的としています。

あわせて、この研究会のメンバーが旧ジャウィ文書研究会で行っていたジャウィ文献の講読講習会を引き継ぎ、毎年1回、一般公開でジャウィ文献講読講習会を行っています。2009年度と2010年度は東京大学で行いましたが、2011年度以降は東京外国語大学マレーシア語学科のファリダ・モハメド先生の協力を得て東京外国語大学で行っています。

●イスラームとイスラム教

最後に、このテキストで使われている「イスラム教」という表記について簡単に説明しておきます。現在、日本語の学術論文では「イスラム教」ではなく「イスラーム」と表記するのが一般的です。これには、①アラビア語の長母音を正しく表記すること、②イスラームにおいては宗教とそれ以外の実践が区別されていないために「〇〇教」とするのは適切でないこと、という2つの理由が挙げられています。

「ジャウィ文献と社会」研究会では、この考え方を尊重した上で、上記の2点について東南アジア地域に即して検討した結果、①マレー・インドネシア語には長母音がなく、現地語の「Islam」は「イスラーム」と表記するのが妥当であること、②マレーシアやインドネシアではイスラム教を仏教やキリスト教とともに「宗教」(agama)の1つとして位置づけ、それによって多民族・多宗教の混成社会を運営する努力が積み重ねられてきていることの2つの理由から、現地社会の営みを尊重すべきと考え、「イスラーム」ではなく「イスラム教」の表記を採用することにしました。

この表記には、中東・アラブ世界から各地に伝わったイスラームが、その普遍性が意識され続けながらも、各地域の事情に即して受け入れられ、それぞれの地域社会で位置づけられてきたという理解のもと、その両方の側面に目を向けることを象徴的に表明するという意味も込められています。その上で、「東南アジアではイスラームではなくイスラム教とすべき」というように統一を強いる態度は多様性を内包するイスラム教にはなじまないとの考え方のもと、それぞれの立場や考え方に応じた表記を用いています。このテキストの中では執筆者によって「イスラム教」と「イスラーム」の表記が統一されていないものもあり、その点で読者に不便を強いることとなりますが、以上のような考え方に基づいていることをご理解いただければ幸いです。